



医学生や研修医、ベテラン医師にも購読を勧めたい良書 誰も教えてくれなかった「風邪」の診かた 重篤な疾患を見極める！

岸田 直樹 著

A5 頁 192 2012 年

定価 3,360 円(本体 3,200 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01717-6] 医学書院刊

[評者] 山中 克郎(藤田保衛大 総合救急内科)

風邪の診断をするときによく思い出すのは、田坂佳千先生の「かぜ症候群における医師の存在意義は、他疾患の鑑別・除外である」という教えである。ありふれた疾患の水面下には、目では見えない大きく深い世界が隠れている。内科全般にわたる広範な医学知識と適切な問診や身体所見から目に見えない部分を感じとることが必要だ。風邪のふりをした、とんでもない重症疾患があるのだ。

風邪には咳、咽頭痛、鼻汁の3つの症状がある。この中の一つの症状しかなければ風邪の診断は怪しい。咳+発熱だけなら肺炎、咽頭痛+発熱だけなら急性喉頭蓋炎、鼻汁+発熱だけなら副鼻腔炎かもしれない。本書では典型的な風邪の症状について、いくつかの症状パターンに分けてわかりやすく解説されている。漢方処方が不得意な私にとっては、咳には「麦門冬湯」、鼻水には「小青竜湯」、咽頭痛には「桔梗湯」との提案はありがたい(p 11)。診療の幅が広がりそうだ。漢方はことさら強い主張はないのに、中国 3000 年の歴史から凛としてロマンチックな雰囲気醸し出してくれる。

さらに、忙しい臨床医が陥りやすいピットフォールについて具体例が示されている。長引く外来では思考をちょっと休めたりしたくなるが、風邪という診断をつけて思考停止に陥ることだけは避けたい。肺炎と風邪との違いについてのポイント解説が実に明快である。

- ・全肺炎の7%で初期は肺炎像がはっきりしない……p 48
- ・肺炎を疑う病歴の極意：①悪寒戦慄を伴う 38℃以上の発熱+咳、②二峰性発熱、③ 38℃以下でも高齢者や肺に基礎疾患がある人の気道症状+寝汗……p 49

・マイコプラズマ肺炎の特徴：鼻汁、咽頭痛、38℃以上の発熱が3日間以上続く若年成人、流行あり、胸部レントゲン写真で浸潤影、皮疹(多形滲出性紅斑以外でもよい)、関節腫脹、肝機能異常……p 55

また、次のような実践にすぐ役立ち、他の医師にちょっと自慢できるクリニカル・パールも満載である。

- ・初期に局所臓器所見がはっきりしにくい感染症：①急性腎盂腎炎、②急性前立腺炎、③肝膿瘍、④化膿性胆管炎、⑤感染性心内膜炎、⑥カテーテル関連血流感染症、⑦蜂窩織炎、⑧カンピロバクター腸炎の初期、⑨歯髄炎、⑩肛門周囲膿瘍、⑪その他：髄膜炎菌敗血症、サルモネラ、レプトスピラ、レジオネラ、ブルセラ……p 64
- ・成人+初期に高熱のみとなりうるウイルス疾患：①インフルエンザ、②アデノ、③ヘルペス(成人水痘の初期など)、④麻疹……p 70
- ・高齢者の多関節炎の鑑別診断：①非典型結晶性関節炎、② streptococcal arthritis(特にG群)、③傍腫瘍性症候群(特に肺癌)……p 106
- ・「頸部痛なのに頸部に何もない」ならば、①大動脈解離(頸動脈解離を伴わなくてもよい)、②心筋梗塞(狭心症)、③くも膜下出血、を考える……p 129
- ・高齢者の診療では家族が訴える「何か変」は、ほとんどの場合正しい……p 161

風邪診療をすっきりと粹にこなしたい医学生や研修医、そしてベテラン医師にも広く購読を勧めたい良書である。この本は common disease を極めることこそ臨床医としての真の実力を高めるのだと考えている多くの臨床家の心に響くだろう。時を経ても永遠に新しい古典のように、この本の智慧が若手医師に語り継がれることを私は望んでいる。